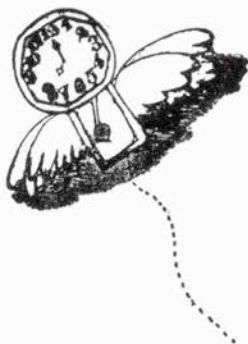


神戸百店会
だより



★日本の伝統美を雅やかに

みよしや秋の発表展

パリコレもいけれど日本のきものはやっぱり素晴らしいファッション。9月



辻が花の美しさにうっとり

11日オリエンタルホテル二階大広間でみよしや秋の特別創作発表展が開かれた。主調は「温故知新」。桃山の趣き辻が花のコーナーでは参考作品として久保田一竹さんが出品。世に幻の文様といわれている辻が花の格調高い美しさに思わず足をとめてウツトリと。

加賀友禅五人展で友禅の腕を競う成竹登茂男、毎田伝郎、水野博、三口勝章、押田正義さん。友禅界が加賀に伝えた深法の極付を堪

能、NHKでも放映された

大島紬のコーナーでは田中

郷次、平田清さんの別織逸

品が伝統の美を表現。

★神戸で初めての補聴器

オーディオコーナー開設

補聴器はメガネと同様、

ひとりひとりの難聴の程度

によってすべて異なりま

す。元町3丁目の神戸眼鏡

院では神戸で初めての補聴

器オーディオコーナーを開

設。専門コンサルタントが

防音測定室でオーディオメ



最新技術のオーディオコーナー

ーターによる聴力測定、メ

スボックスによる補聴器の

微調整、耳栓型取など西下

イツの権威ある補聴器専門

技師クリングバイエル氏の

指導・設計による最新技術で、最も快適な補聴器を選んでもくれる。ナショナル(国産)とポツシユ(西ドイツ製)でポケット式、耳かけ式、メガネ式、イヤホン式がある。メガネの方もお忘れなく。

★末積製額、秋の展示会

9月3、4日の両日、農

業会館11Fで大丸前の末積

製額が秋の展示会を開催し

た。業者向けの展示会とあ

って北海道から九州まで全



展示場にて末積社長夫妻

国百五十社から集まって、

額や油絵、掛け軸など一堂

に受注できるようにになって

いる。額縁も一時大変シン

プルなデザインが多かった

のですが、又近頃は金箔の

彫刻を施したようなオーソ

ドックスなデザインに人気

があるようです」と末積社

長。油縁、デッサン額、色

紙額などの新しいデザイン

に業者の人達も熱心に見入

っていたようだ。

末積製額 331-1309

●ショップトビックス

★「GRACE KOBE」のB1

(エレガンスフロア)にロビー

ジマ、1、2F(専門店フロア)に

ティックセリザワ、服飾雑貨

から履、ブティックシワ、舶

来ブティックサンジェル、靴の

成駒家3FにSportsworld33

がフレッシュにオープン。よろ

しくお願いします。

★UCCレギュラーコーヒー

ズに答えて、コーヒーの因

ブラジルのカーニバル(12日

間の旅行)に20名さまを招

待して、①炒ったコーヒー豆

を使用し、ドリッパーやサイ

フォンなどでたてて飲むコ

ーヒーを②③④⑤⑥⑦⑧⑨

⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳

⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳⑳



★昭和54年度神戸市文化奨励賞は造形の斎藤氏に
神戸市の文化発展に貢献し、業績顕著な個人及び団体に贈られる神戸市文化賞と、文化活動において将来を期待される個人及び団体に研究、創作活動を奨励助成するために贈る神戸市文化奨励賞の本年度の受賞者が決定した。



受賞する斎藤智さん

神戸市文化賞は武田芳一(小説68歳)、橋岡石(俳句76歳)、江田誠郎(洋画76歳)、大垣泰治郎(洋画70歳) 榊井一夫(洋画71歳)、広津雲仙(書68歳)、大熊誠(洋楽66歳)、荒尾親成(学術76歳)、清水重夫(体育78歳)の9氏に、文化奨励賞は、

多面的な現代空間の表現に独自の制作哲学をもち、一貫してその可能性を追求している斎藤智氏(43歳)に贈られた。

贈呈式は9月8日午前11時から相楽園会館で行われ、宮崎辰雄神戸市長から各受賞者に表彰状と記念品が手渡され、そのあと受賞者を囲んで和やかな祝賀会がもたれた。

★現代美術の発表の場を中国景德鎮の「祝胎瓷」や醴陵の「彩下彩細瓷」を主とした中国現代陶芸と、その芸術的価値が再認識されつつある「汎太平洋民族芸術器」。そしてエンバ美術展に参加した作家たちによる現代美術の発表、を三本柱に企画を進めているギャラリーエンバが9月4日オープンした。

「文化的サロン」として、また今秋芦屋に開館予定のエンバ中国近代美術館のパイ

ロットギャラリーとして愛される場にした」と、作家であり文化事業部長の吉



初日のパーティ中央が植野社長

田稔郎氏。初日には木村重信、村松寛氏をはじめ阪神間の作家達が多勢つめかけ、なごやかなパーティが開かれた。

ギャラリーエンバ/生田区下山手通3-44 鯉川筋西田ビル1F 電話331-6214

★ポルトアイランドでブルーグラス・フェス

神戸はアマチュア音楽の街といわれるくらいに「音楽仲間」があちこちに。来る10月14日(日)には、ブルーグラス仲間が集まって、第一回神戸ブルーグラ



ジョッシュ大塚とリーブスオブグラス

ス・フェスティバルが開かれる。場所はポルトアイランドの北公園。出演は、ジョッシュ大塚とリーブス・オブ・グラス、シャギー・

誕生日
ありがとう

運動



運動の輪は広がる

今月は、誕生日ありがとう運動にご賛同いただき、ご協力いただいた方の手紙を紹介いたします。◇毎日お忙しいこと存じます。おはずかしいことながら、私はほんやりと五十年を過ごしてしまいました。世間に何らかのお礼をしなくてはと、心がありながら何も実行できず情なく思っております。

勝手ながら私の分までがんばっていただけたらと虫のいい事をお許しください。ここに献金を同封いたします。

みなさまのご多幸を祈っております。(名古屋 匿名)

◇先日、毎日新聞の朝刊にて「誕生日ありがとう運動」を知ることができました。私は、五月十九日生まれで今二十三才です。お誕生日はとっくに過ぎておりますが、来年の五月を待っておれませんが、早速運動に参加させていただきます。(大阪府富田林市)

◇(前略)私七月六日に出生いたしました。「武田倫明」と名付けました。無事産まれて元気に成長しております。そこで、感謝をこめて、障害児の方々が、幸せ多い毎日を送られますようにお祈りしたいと思ひ「誕生日ありがとう運動」に参加させていただきます。

お世話なさっているみなさま方のご苦労は大変なことをごんばっております。尊いお仕事をがんばってくださいませ(岡山県備前市)

誕生日ありがとう運動本部

651神戸市葺合区御幸通八ー一六 神戸国勢会館1F郵便局の隣 電話二五一ー八一内線三二六

マウンテン・ボーイズほか
京阪神のバンド20。みんな
アマチュア。さすがにブル
ーグラス発祥の地神戸らし
い催しで、始動した人工島
ポートアイランドでの初め
ての音楽フェスティバルで
ある。

第一回神戸ブルーグラス・フェス
ティバル 10月14日(日) 11時～4時
/北公園にて/無料/小雨決行(雨
天の場合は10月28日)
お問い合わせは神戸・ホンキートンク
24112161

★初代若柳吉童、 二代目吉金吾襲名

本誌主催の第5回ブルー
メル賞古典芸能部門で賞
を受けた藤間緑寿郎さんが
この秋、父にあたる若柳吉
金吾師の名跡を継ぎ、二代
目若柳吉金吾に、また父上
は、初代若柳吉童を襲名す
る。



初代 若柳吉童 二代目 若柳吉金吾

その襲名披露の会が11月
2日～4日まで神戸国際会
館大ホールで開かれる。2
日の襲名の序幕には長唄

「操三番叟」を吉童の翁、
藤間緑寿の千歳、孫の林雅
弘君(6才)が三番叟、後
見を吉金吾と親子三代が勢
揃い。吉金吾は長唄「鏡獅子」
清元「北州」夫人の吉

里は大和楽「花吹雪」吉童
の禿で宗家、家元と「尺璧」
が呼び物だ。

また会終了後の夕方6時
から生田神社会館で、友人
が企画した襲名披露パレ
イが開かれる。二代目吉金
吾がパーボンクラブ会員で

あり、応援団が賑やかにお
祝い会のプログラムをねつ
ている。親子三代揃った舞
踊一家の健闘を祈りたい。

(入場料は各日三〇〇円お問合せ
は、電話〇七八一三四一六八三一
若柳吉金吾内)

★雪の杜若「東京に開く

モダンダンスの世界に日
本の美と情念を追って10
年。今岡頤子舞踊団(生田区
加納町5 住友ビル6F 電話151
8)が、11月1日待望の昭
和54年度芸術祭参加として
東京の草月ホールでリサイ
タルを開く。

プログラムは「翅」を今
岡・五木田勲「お七」加藤
きよ子・上甲裕久「雪の杜
若」今岡頤子 加藤きよ子
今岡頤子



踊る。台本/岡田美代、振付
/庄司裕、美術/朝倉撰、
衣裳/藤本ハルミ、照明/
林恵介、作曲は藤舎推峰で、
中川善雄、藤舎呂悦、成敏
らに、お七は文楽の豊竹嶋

大夫、野沢吉兵衛さんらが
生演奏。神戸のモダンズム
が生んだこの日本追求がど
こまで燃焼するか話題を呼
んでいる。(¥3000)

★新井満さんと大森一樹さ ん、CFを協作

5月号の本誌の座談会で
初顔合わせそして意気投合
「では一緒にコマージュ
フィルムを撮ろう」という
ことになったシンガーソ
ングライターで電通マンの新
井さんと若き映画監督の大
森さんがニッケの学生服の
CFを、大阪鞆公園で先程
無事撮影終了。音楽は映画
「青春の門」のテーマを使
っている。



撮影中の大森さん<左>
と新井さん

実際テレビに放映されるの
は来年の1月からだが、で
き上ったフィルムの試写に
ご両人まずまずの出来と満
足だった。瓢箪から駒のよ
うなハナシである。

★ラジオ関西

10月からジャズの新番組
秋になると放送番組の編
成変えが行なわれるが、そ
の中のひとつ、海の見える

美術 ガイド



★兵庫県立近代美術館
美術館・博物館名品展
10/10～11/4

サルバドール・ダリの版画
10/22～12/2

★KCCアートギャラリー
舞子焼 南沢陶芸展
9/29～10/6

荒子窯・古丸健太郎作陶展
10/8～10/16

★KCCギャラリー
第8回小さな自詩書展
9/28～10/4

写真展 第2回展
10/5～10/11

神戸新聞美術クラブ展
10/12～10/18

六甲陶芸会作陶展
10/19～10/25

★キタノサカス
「時間」展/パフォーマンス
10/7～10/20

★フジカワ画廊大阪店
伊藤慶之助近作展
10/11～10/17

★ギャラリーあじさい
柏月水露南画展
10/21～10/27

三周年記念神戸洋画界展
10/29～11/7

岡宏風景画展
10/23～10/28

中岡恒雄水彩画展
10/30～11/4

★芦屋ギャラリーりへるへ
カトラ石版画展
10/13～10/21

★そごう神戸店美術画廊
満田天民日本画新作展

中道養月絵画展
10/5～10/10

現代人気作家版画展
10/28～10/31

第2回炎の陶工
10/12～10/17

月形那比古展
10/19～10/24

「寄って候」出版記念
10/26～10/31

鴨居玲△素描展
10/26～10/31

放送局からジャズの番組が流れてくる。音楽に強いラジオ関”ならではの企画で

土、日を除く毎日、夜9時から一時間、題して「ジャズ・タイム・ナイン」がそれ。末広光夫さんの総合会社に、「ジャズ5番街」「私とジャズ」「ジャズレコード百科」「ジャズ・アラカルト」などのコーナーにジャズ評論家の油井正一、本多俊夫、行田よしおの各氏や藤岡琢也さん、北村英治さんら多彩な顔ぶれが登場し珍しい話題も提供される。秋の夜長に、水割りでも飲みながらジャズを、って気分がにびったりの番組だ。

★ムンジャクンジュをこ存知ですか？



岡田淳さん
も美しく香り高い花が咲いていまし

た。そのクローヤマソウを食べるムンジャクンジュは毛虫でも飛べれば犬でもなく空も飛べれば時間も解る「生きもの」で五年生たちの秘密のベツトだったので……本誌の漫画を書いている岡田淳さんの書き下ろし『ムンジャクンジュは毛虫じゃない』が出版された。

構想を練り始めてから5年「パントマイムのような漫画を描く」淳さんが今回は

作・絵と、児童書の分野にも進出です。さてムンジャクンジュはどうなるのでしょうか、それは読んでのお楽しみ。併成社版一九〇頁七八〇円

★伊丹三樹彦句集「島嶼派」



伊丹三樹彦さん
在住/青玄主

を詠んだ伊丹三樹彦(尼崎市瀬戸の島々、四国の島々)に名残り遊びの「マタアシタ」作者の瓢々とした人柄が滲む句集。(二〇〇〇円)

私の親たのは結局その一部であったが、やはり感動的な展観であった。

明治になって音を立てて流れこんできた西欧美術と日本で育ってきたいた日本美術との激しい交流の軌跡が聞こえるようであった。

異質な文化のぶつかりあいのなかから生まれ育って来る新しい文化というものが迫ってくるようであった。

そして、やはり日本人がもっている美意識の確かさ、日本人のもっている

感性のすばらしさを実感した。

それは、日本の文化の土壌の深さに抱えるものであろう。

一時的には模倣であったり写しであってもそれを確実に消化して新しい美を創造してゆくエネルギーは凄。

これは、日本の特性なのであろう。そしてその創造者の多くは関西から生れていることも見逃せない。関西の文化的土壌の豊かさをまざまざと見せてもらった。(Y)

時計花



ある美術展から

新装なった東京都美術館で「近代日本美術展」が開かれていた。日本の近代美術一〇〇年の動きを二百人を超える作家、二百三十数点で構成したものであるという打ち出された。

●KOBE POST

★美術の秋、十月六日(土)〜十四日(日)迄第第三回西村功一ロイヤル水彩展/十一月六日(火)〜十八日(月)迄第第十回具象人間五人展(中西勝、鴨居玲松本宏、河野通紀、西村功)が、元町画廊の60周年記念のプログラムとして開かれます。

★画家の石阪春生さん(新制作協会の個展が、神戸大丸の美術画廊で十一月六日〜十一日迄開催)★現代美術の植松奎二さんが九月三十日デュエルドルフから帰国★作家の田辺聖子さん、ご主人の川野純夫さん、漫画家の高橋孟さんと一緒に竹田洋太郎さんを案内役にして十月四日から約二週間ニューヨークへ旅立たれます。

★マンガ家の岡田淳さんが移転されました。〒650神戸市東灘区本北町2ノ14/27岡本ハイツ302室(五二一九〇九)

★甲南大学の黒崎勇教授が、九月一日より一年間、甲南大学在外研究員としてドイツでドイツ中世文学及び語学研究に留学。前半はチュービンゲンに、後半はミュンヘンに滞在されます。新住所はAWO-WOHNEIM HART-NEVERSTR. 27400 TÜBINGEN BRD (WEST-GERMANY) 留守宅/東灘区本山北町五ノ二ノ一〇〇〇七八(四一一)五三二六

★二紀会の神戸鉄吾さんが、淡路の洲本より神戸へ移転。新住所は〒655垂水区青山台一ノ一九ノ八番七五二・六三七七

★神戸国際ステージKKで永年、大道具方として活躍された奥田春一さんが、この程定年退職。ごくろうさま。現住所〒700大阪府金岡三丁目十三番六号〇六(六七二八)四五一一三

★フラメンコの富田隆さんが十月六日出身地秋田でライイタル。久しぶりの秋田帰りで大ハッキリでした。

Jazz Space with You

神戸のなかに神戸ができました
それがJOYFULなのです



ボトル / タラモアデュ ¥6,000 水割 ¥500
ビール ¥500 おつまみ ¥500 ビザ ¥600
チキンバスケット ¥800 グラタン ¥800

演奏時間 8:00PM~11:30PM

パブレストラン ジョイフル

神戸市生田区中山手通2丁目138 高島ビル2F

TEL 078-332-1866

6:00PM~2:00AM (日祝/5:00PM~12:00PM)

第3日曜休み

You and the Night the Music

あなたと夜と音楽と



落ち着いたムードと小気味よい音楽を……

ライブ・タイム 毎夜8:00・9:00・10:00・11:00の4回

SOUND INN

キャンデー

山本 恵子

神戸市生田区北長狭通1丁目41-2
生田新道レンガ筋角ニューアカンビル3F
☎078(392)3606 P.M6:00~P.M12:00



ルポルタージュ

●知らない人の神戸／4

北野町から…

蒼 竜 一

北野町は、坂道である。

不動坂、北野坂、ハンター坂等、北に向う道はすべて

坂。本来、坂は苦痛と安らぎの同居する処、上るときは

自ら下を向き謙虚の姿となり、立ち停って見下ろすとき

カメラ／緒方しげを

にはその心まで傲岸なる形をとる。それが表裏なす気まぐれさ。上る人と坂をおりる人の擦違いに、劇的なる心の動きをみる。人は必ず振り返る。己の道を時として立ちどまり顧みない者はいない。古来、坂にロマンを感じ

屋下がりの北野にて



る者が多いのもそのためであろうか。

坂道は山に近付くにつれて、急な細い上りとなる。その突きあたり、一番高い所に、*グウロ*の家」と呼ばれている異人館がある。壁面のうろこ状のスレートは、下から見上げると大蛇の膚のように生々しい。大正十一年、外国人向けの借家として建てられたという。その裏手、山際に沿って細い道がある。自分が訪れた時には折からの蟬時雨、涼風が吹き抜け、眼下の回教寺院のドームの向こうに、港が見え海が広がり、素晴らしい眺望があった。すぐ下の坂道には、引きも切らぬ観光客のざわめきがあるというのに、その山際の小径には、塵界を遠く隔てたような趣があった。

おそらく秋には、乾いた音をたてて枯葉が転ってゆき冬には思い切り寒風が頬を刺すであろう。陽気な癖に淋しがり屋の神戸っ子の人が居るなら、そのこみちが何処にあるか分る筈だ。懐しい孤独な旅する人には、私はその径をおすすめしたい。そこで憩うひとときが、遠い歳月の流れのうちには、疲れ果ててしまったと感ずるあなただの心に、再び立ちあがり歩み始める勇気を与えてくれないとは、誰が言い得るであろう。人は皆そのような心象風景の一つも抱いて、生きて行くのではなかったのか。

北野界限が現在多くの若い女性を魅きつけている理由の一つは、案外そのような処にあるのではなからうか。

異国情緒やブティックやアンティークと言いながら、その実彼女達は人生に於ける一コマの心象風景を求めて、海の見える坂道をのぼっているのではなからうか。

ある人が、神戸には奈良や京都のように純日本的な古い物がないから、異国情緒と海で若い女の子を誑かして商売をするという意味のことを話していたが、果してそうであろうか。

私には、彼女達を誑かしているものは、外ならぬこの人生そのものように思えてならないのだ。

私は最近異人館めぐりのコースを三度ばかり歩く機会を持った。海があつて坂の多いところは、サンフランシ

スコによく似ている。しかし、シスコのように上りがあつて下りがあるというのではない。北野には上り坂しかないのである。

そして上に行くほど道幅が狭くなっている。車の数が減る分だけ、猫の姿を見かけることが多くなる。私は犬の方が好きなのだが、心の中では猫を飼う人の方が、より民主的で平和を愛する人が多いと評価している。北野は平和を愛する民主的な街なのだと思う。

歩きながら目にする表札には、外国名のもがずいぶんとある。しかもそれ等がこの街に溶け込んでいる。そういえば、日本の文化の在り様そのものが、香港やシンガポールに於けるそれとは、明確に異なるようだ。ここまでが外国文化のそれで、ここからが日本文化のそれであるなどと判然と分け隔ての出来るような形では、決して存在していないということ。内なる物と外なる文化が、融合しきつているということ。極論すれば、もともと純粹に内なる物は初めから存在しなかったと言ってもよい位に、——ただ融合の度合が、奈良と神戸の違いにすぎないのだと思われてくる。

異国の文化が極めて自然に生活に密着した神戸の姿はむしろ奈良朝の日本の姿により近いものを感じるのだ。神戸は歴史が新しいだけに、異国との文化の面では、逆に神戸ほど日本的な街はないと言う理由もそこにある。

そんなことを考えながら、私は北野の坂道を巡つた。勾配は、思索にちょうどよい具合に出来ている。若い娘が多いのも、大して気にならない。女性がのさばっている限り、大きな戦争は起きないと思うから、安心して居られる。

異人館は、それなりに立派に造られているのだから、それでも外国から来た人達の仮住居という印象は、免れなかった。いつか去って行く者が、貿易に従事したり外交に尽したりの違いはあつても、当地に骨を埋めるべくして自らの家を建てたのだとは思えなかった。異国に滞在する期間を、とにかく快適に過ごし得るだけの家を、

彼等の資力を持ってして無理のいかぬ程度に建てたのに違いない。もちろん、現代の日本の住宅事情からすれば、ずいぶん居住空間は贅沢なものがあろう。しかし彼等の本国の基準からすれば、中産階級以上のものでは決してなく、彼らの当時の社会的地位や資力に充分匹敵するだけの建物であったとは思えなかった。

私はかつてアメリカの映画俳優ジョージ・ハミルトンの家に、スクールボーイのような形で住み込んだことがあるが、山の上に建つその家は、掃除器をあてるだけでも朝九時から午後三時位までかかったものだ。バストイレ付きの寝室は限りなく、舞踏室はちよつとした小学校の構堂位の広さがあつた。壁には欧州中世の甲冑刀剣が飾られ、ステレオ装置から映写室まで備えていた。当時ジョージと噂があつた大統領の娘が来て泊る部屋には、円型のベッドに天井からレースの衣が掛けられ、床の絨毯は五センチ以上の厚さがあつた。庭の五十メートルプールには、いつでも泳げるように絶えず浄化装置が水をきれいに保っていた。

怠け者の私は、いつも酔っぱらつた兄のビル・ハミルトンから、仕事をしないと殺すぞと怒鳴られながら、それでも床を磨く宇宙人のような機械に振りまわされていた。昼寝ばかりしていたので、私は臆になつた。秘書が、帰つたらエンペラ・ヒロヒトに何と話すのかと冗談を言ったが、彼等の生活を羨しいとは思わぬばかりか、私は何と可哀そうな人々だろうと、本気に思っていたものだ。彼等は心身ともに倦み疲れていた。毎日のように夕方出て行つては、真夜中に大勢のお客を連れ帰り、舞踏室でまた騒ぐといった生活を、人はどれほどの期間耐えることが出来るものであろうか。それが日常になつてしまつた人の心の内を想像して見給え。

異人館から例によつて話が逸れてしまつたが、この辺りで私は地についた北野の人達の生活に触れねばならぬ。

現在異人館通りには、キングスコート、ローズガーデン、

ン、北野アレー、異人館倶楽部の四つのファッションビルがある。これらの店内を一巡すれば、この町が元町や三宮とは、いささか趣を異にしているのが、膚に感じられる。その他にも、坂をのぼりつめた処に、普通の住宅と変らぬ装いで、手づくりの皮製品や木彫品、染め物、陶器、貴金属の装身具、小物などを売る店がある。お客は観光客の若い女性を中心で、値段も千三百円から三千円位の物がよく売れるとのことであつた。それでやつて行けるのかと尋ねると、やはり固定の顧客があつて、友人が来たので案内して来たとか、誕生日の贈り物にとか言つた感じで、買って行くとのことであつた。また暑い夏と寒い冬にはお客が少いというのも、坂になつている関係上、下で人々は買物を済ませてしまつたためらしい。

北野町では商売をして金持ちになろうというのは無理だと、町の人も言っていたが、見るからに優雅にやつて行こうという人達が多いように思えた。

もともとこの北野町界限は、商館などに働く外人の居留区であつたという。その後、マンションが建ち、ラブホテルが建ちはしたが、依然として静かな住宅街で物品販売の店も三年位前までは、ほとんどなかったということだ。

店の経営者も元町あたりだと五十歳から六十歳代の人が多いのに対し、この町では三十歳代の経営者がそのほとんどを占めている。いきおい、商売に対する考え方も違つてくる。店主の個性、ポリシイが強く入つていて、何を売つたら儲けになるかということよりも、自分が何を売りたいのかという主体的な意志のもとに商品が選ばれる。店主の個性は極めて強く反映し、また同時に趣味性が強くなる。食べ物でさえ、ファッションの一形態とみなすような精神がその根底に流れているのだ。

これは若い人達の生き方、人生に対する考え方が、そうさせるのであろう。お客様は神様という言葉のもとに、売る側の思考行為にかかつてくる掣肘から自由でありたい、買手が自由である同程度には、売手もまた自由であ



北野町では高売をして金持ちになろうと云うのは無理だと、町の人も言っていたが、見るからに優雅にやって行こうと云う人達が多いように思えた。

ってよいではないか、そこに遊びの要素が入って来、さらには自己主張が生まれたりする。何代も続いた元町あたりの老舗の主人と、北野町の若い店主を噛み合わせたら、楽しいだろう。もちろん話の噛み合わない部分も出てくるだろうが、思いがけない発想が生れたりする可能性はある。

ローズガーデンの若き経営者である若山晴洋さんの言葉をもって、この項を閉じよう。

「クリエイターが沢山集まり、情報が集まり、新しいものの創造される町、北野は未来にわたってそのような町でありたいのです」

若き町、北野は、その坂道がすべて上りであるように、今後益々ユニークな街として発展するように祈りながら、私は今あがって来た急な坂道を下り始めたのであった。

(次回は有馬から...)



★シヨート・シヨート・コウベ〈3〉

季節は風のまにまに

田 靡 新

絵・田中徳喜

海からの風は、もはや山手にまで匂わなくなった。春かすみを吹きちらす若い嵐に荒れた翌日、ペランダのガラス窓が砂塵で黄色い粉をふいたようにくもった。厚いガラス窓の向うは繁華街のビルディングで埋まり、海は、はるか彼方に押しやられ、北野町からも鈍色の海が眺められなくなった。

まゆみは、毎朝目を覚ますといまでも海の色を見たいと思うのだが、久しくその欲望を断切られている。例えば空を見あげると、はるか遠くの海が写るような大きな反射鏡があったら楽しいだろうなと思うのだ。

「わあ、すごい砂埃よね」

妹の美矢は、誰かと喋っているのだろうか。いや、相手に喋るように独言をいっているのだ。最近、その癖がひどくなっている。

「きつと中国大陸からの砂よ。このあたりの砂とは、まるで違うわ」

海を埋立てポートアイランドの新しい街をつくるため須磨の高倉山を削取ってしまったという。その砂利運搬船を曳航するタグポートは、美矢も何度かみているが、この砂埃は須磨の山土じゃない。

風はわずかに海から吹きあげてくるが、磯の香はなく、どこことなく埃っぽい。まゆみは部屋のなかでケープを編

んでいる。細い毛糸を何本も結びつなぎ、わざと毛羽立たせる編み方は、彼女の膝の上で紫色の繭のようにうっすらと紫煙にまみえている。美矢の独言を聞いているとまゆみの口のなかまでが、砂利つぼくなる。これも春のさざしだ。

美矢は、ペランダの鉢植や屋根瓦の砂埃について独言ちっている。空は晴れているのに、全体がくもり黄色く煙っている。大気圏には、まだ中国大陸からの砂塵が吹きぬけているのだろう。三千キロメートルも離れたゴビの砂漠からの砂塵が季節風に乗って日本列島を被い、はるか北アメリカ大陸にまで及ぶという黄砂は、いったいどんなスケールなんだろうと美矢は考える。父が中国でみた光景では、厚い壁が迫ってくるという。長い塀が、スローモーションの映像のように崩れに崩れ、一寸先も見えなくなると聞いてはいたが、美矢には、どんな砂嵐をも想像がつかない。

『黄砂は水に沈まないんだよ』。父の話がまた想い出される。『飯盒のなかで、いつまでも黄色く浮いているんだもんね』。じゃ、年中季節風に乗って大気圏を翔んでいるのかしら。

「春先は、これで嫌なの」

「草も木も、いっせいに生命力をたぎらせるように構えるでしょう。生理的に負けちゃうのね」

美矢は、自分の薄い胸を抱いて怖い顔をしている。

ガラス窓一面の砂は、黄砂というよりは赤味をおびたオレンジ色に近い。美矢は、窓に指をそえ線を曳く。米粉と同じ感触だ。そのうち男の名前をなぞってみる。磯上昇。美矢は、一名前書き終えるたびに溜息をつくらしい。文字は楷書であったり、行書をくずした草書にしたり、ローマ字もまじえ、一人の男の名前をなぞってゆく。風の音を忘れ、窓ガラスに写っている自分の顔が、朝のひかりにまぶしく浮かんでいるのに気づいてない。男のイラストは、たぶんその磯上なんとかなのかも知れない。人差指にふれる砂の粒子は細かく粉のようになめらか。

匂いはない。美矢は恰好の落書板でも見つけたように一心不乱だ。そんな姿をまゆみは、編みものから顔をあげてみる。

「まるで子供だわ」

まゆみは眩しきながらも、わずかに右あがりの男の名前を見分ける。

「ボーイフレンドなの」

悲しみにうちひしがれたように、いまにも泣きだしそうだ。

「死にそうなの」

「だれが」

「サッカー部でしごかれ、腕を折ったの」

「腕の骨折ぐらいでは死なないわ」

「ただの腕じゃなのよ。学校一の黄金の腕だったのよ。しかも折れたのは腕だけじゃない、魂までも」

「受験にも失敗したってわけ」

美矢のおおげさが始まったとまゆみは聞きながす。編みもの手をやすめないで喋ってゆく。

「父さんもいってたじゃないの。昔は、男の兄弟の多い家では、年中誰かが骨折して石膏で固めた片腕を首に掛けていたもんだと」

まゆみは、いまそのことを美矢に話しても慰めにはならないと思う。まして姉妹だけの家庭では。

「怪我をしたり、傷つきあって、みんな大人になっていくんだから」

まゆみは、やっぱりここまで喋ってしまったくないと気がすまないのだ。美矢に論しながら結局自分に言い聞かせている風でもあった。

まゆみには、ゆうべの風が一晚中ヴァイオリンの旋律に聴えた。地の果てから風が舞い雲が翔び、ひかりが渦巻く。大地はあくまでも柔順に風になびき、そのざわめきが次から次へと共鳴音を呼び怯える。弦の擦れあう音も途絶えない。それとも女のすすり泣きかしら。まゆみの耳の底に泌み込んでくる。いいえ、もともと彼女自身

の耳の底から悲愴が湧いてくるのではないかと、たびたび寝返りしては、眼を覚ました。窓の外は、意外に明るく、昼間とは別な明るさが、まるで清澄な海の中を眺める気分にした。白い雲が、青空を泳いでゆく。大きく大きく猛だけしい塊が、もこもこ這っている。薄い真綿を引裂いたようなちぎれ雲が、青空に溶解してゆく。その間にもまゆみは風の音を逃さなかった。突風は窓の隙間にぶち当たってフルートとの二重奏をはじめている。

遠くから聴える旋律は、いつも悲しい。まゆみは、その人の言葉を想い出していた。山手のクラブを専用にピアノを弾いているまゆみにネパールのみやげだといって熊内はサーランギという小型ヴァイオリンをさげてきた。チーク材をくりぬき、四本の弦も調整ができるし、絃もちゃんとついているのだ。その音色は、熊内が弾いても、悲しい音色しか出せない。

「本来は、はるか彼方からの風の音に似ているんだがね」熊内は、まゆみの店へは二、三度来たぐらいで、彼女も彼については詳しくは知らない。彼はなんとか音色を出そうと左腕に持ったサーランギを棒げたまま、まゆみに差し出す。

「家で飾り物になって埃まみれになるよりは、あなたに奏でられる方が幸でしょうから」

こんなこともつけ加えていた。「安いもんですよ。楽器とはいえない価格でね。それより、インド廻りで帰国途中でも、ずつと膝の上に抱えていたことの代価が高くついたほどです」

インドで買ったビーナやタブラも、仲間たちは、それはそれは大事に飛行機のなかでも肌身離さず抱いていたと笑う。まゆみは、大の男が機内でへちまでつくったビーナやタブラを抱えている様子の方が、よっぽどおかしく思えた。もう三年も前になる熊内のことを想い出したのも、ゆうべの風の音のせいだったのだろうか。ピアノのある後の棚にサルギーが埃をかぶったままだ。

美矢が部屋に入ってきた。ピアノの上の砂埃に気づい

たらしい。

「家中が砂まみれよ。寝床も美矢の顔も髪も砂臭いわ。ああ、もう嫌よ」

「この分じや、まだ二、三日襲ってくるわよ」

美矢は応えずにピアノの上の蓋に指を這わせている。

「もう、ボーイフレンドの名前はよしてよ」

美矢は聞いているのか、応えずに指をさかんにくねらせている。

「ねえ、その男を一度連れてきなさいよ」

「姉さんには関係ないわ」

「でもないでしょう。美矢ちゃんが、どんなタイプの男性を好むのか、参考にしたいの」

まゆみはセンター街で妹たち数人の男女生徒が歩いているのに出逢ったことがある。美矢の友達がまゆみをいち早く見つけて、男友達にも知らせる風だった。まゆみは、店に出かける前で挨拶だけですれちがった。その男友達の名前に磯上昇はいたのだろうか。その後、美矢の友達が家に来たとき、昇は、美矢より姉さんを好んでいるのよと話していることがあったが、美矢の口からそのことを告白されたことはない。

「美矢ちゃんは、勝手の悪いときは、返事もしてくれないのね」

まゆみがふりかえると、もう美矢はピアノの前から姿を消している。美矢の部屋からラジオが聴えてくる。また、デイスコミュージックだ。まゆみは、追いたてられる足音にリズムが似て好きじゃない。

黄砂は二日後も北野界限を被って去った。春風はうるんだ涙雨を桜にからませ蕾を押しひらいた。

この季節になるといよいよ唇が渇く。無性に胸さわぎがして落着けない。まゆみは坂道を足指に力をこめ、わざと大股に下りてゆく。風が足許から舞い、膝頭が冷つとすることがある。それでいて鼻の頭や腋の下に汗がにじんでくる。動悸が乳房を突きあげてくる。額にかざす

掌がふるえる。異人館通りから突然若い男が飛びだしてきた。まゆみは突作に駆けだす、ふりむきもせずに。男の足音は、なにもなかったようにまゆみの側を追いこしてしまふ。ハンドバッグを振りかざして抵抗したのは、何年前の春だったかしら。

「姉さんは、男に付けられる雰囲気があるわ。犯罪者はいつもインスピレーションの通りに行動するのよ」美矢が生意気いつていたっけ。

川沿いにある公園の桜は、いまが見ごろだろう。夜来の雨で洗われた花びらが、まゆみは好きである。長い髪が風に弄ばれるたびに若やいでゆく。うす日の空は、春の霞で白っぽく低い。まだ冷たい風が、上空を吹きぬけるらしく、ひやっとする風が胸元を掠める。ざっくりしたセーターからうすいブラウスに着替えたのも早過ぎた

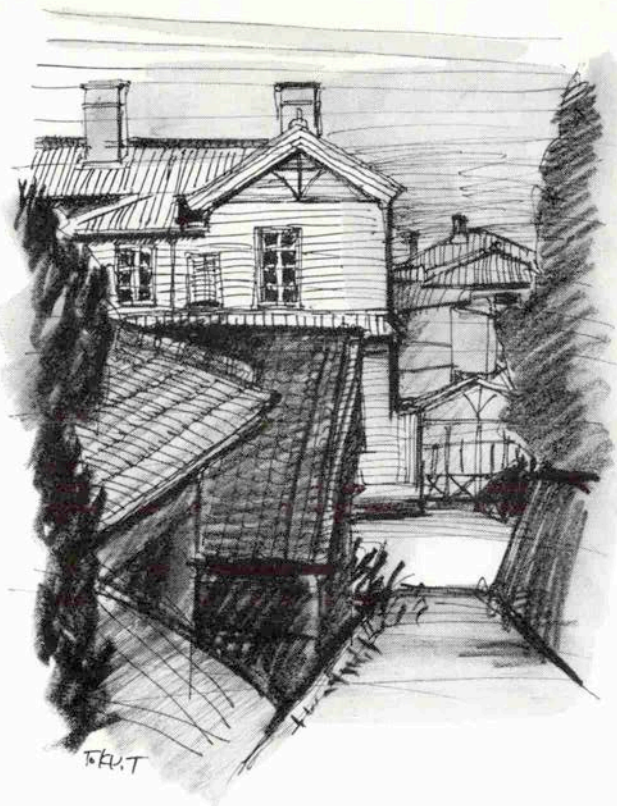
のかしら。お店では、衣替えの早いので評判だけど。編みさしのケーブも、まだ仕上っていない。

通りに面した四角い公園から子供たちの声が湧いてくる。近くのアパートの主婦たちが、子供を砂場で遊ばせている。まゆみは、公園の入口で立ちどまり桜の林をみた。大きく呼吸をして眼を細める。いつも貧相な公園が、華やかに盛りつけられた衣裳で澄ましている。まゆみは花の下に立ち、化粧の顔に映える花影にうっとりしてみる。花びらがちらほら。砂場の子供たちが駆けまわっている。ベンチでは婦人たちが、編みものを手に談笑している。大きな腹を突きだし、汗ばんだ息づかいに気づいたまゆみは、眼をとじ足早に立ち去る。突然、子供泣き声が起る。ブランコに乗っていた女の子が落ちたらしい。叱りつける母親の声も追いかけてくる。まゆみにも

随していなければ、いまのような子が一人いたはず。

もう、きょうを逃せば、こ
としの桜も終りよね。まゆみ
は自分を慰めでもするように
呟いてみる。駅のホームに上
ると、もっとたくさんの桜並
木が見たくなった。電車に乗
ってもまゆみの胸さわぎはつ
づいている。つり皮を持った
まま家並みの固い風景を見過
ごす。狭い家の庭先や社から
も背伸びした桜がとびこんで
くる。窓にはふとんや毛布が
花さかりだ。早くも鯉のぼり
を建てたためだ。家もあつ
た。

電車は桜の枝をひろげたホ
ームに停った。まゆみは立ち
どまっては、一本一本の枝を



見あげた。溜息をつく。香の薄い、淡い花びらが蝶のようにはらはらと舞う。花びらには死のやすらぎがある。歓びでもない悲しみでもない水のようなやすらぎである。ベンチに座って桜を眺めていると花影に駆全体が染ってしまいそう。眼を閉じると花吹雪の華やかさがよみがえる。この桜並木の下に来年も立てるでしょうか、まゆみは、ふと別れたままの熊内に心がゆれる。

彼の家は、この川沿いの駅の住宅街にあった。マンションに建替った通りは、見知らぬ町のように不安だった。それでも、見おほえのある家並みに沿ってまゆみは歩いた。なにかに憑かれたかのように、通りから路地の角に生垣があつて、その向うは黒っぽい人影が連なっている。葬式の櫓が通りの中程まで並んでいる。まゆみの胸は、はげしく鳴った。朝からの唇の乾き、胸さわぎは、このせいであったのかと。まゆみは、もとの堤防へ引返す。あのとときも男の家の近くまできて、この堤防を並んで歩いた。誘われるままついてきたことにまゆみは後悔はしていなかった。

「みんな、桜のせいにするんだもん」

堤防の若草には、かげろうが青くひかっている。その男の裏庭にも桜の大樹があつた。まゆみが堤防から眺めても桜の樹は見当らない。幻だったのかしら。そんな筈ないわ。

「桜の樹の下には、インコやみどり亀にカブト虫、猫も埋めたんですよ。いまに女房でも埋めようかと」。梶井基次郎の作品じゃないが、と熊内は笑った顔で、不意にまゆみに接吻してきた。

「僕も死んだら、裏の桜の樹の下に埋めるよう遺言するつもりです」

空明りよりもあかるく、狐火の群ったような塊が庭の一隅にあつた。樹々の暗がりのなかに、そこだけが炎の輪を幾層にもひろげてかがやいていた。まゆみは堤防を歩きながら、その光景を探し求めた。いまは、花もつけず黒く汚れた枝が曲り、天にのけぞっている枯木をよう

やく見つけた。死んだのは熊内だろうか。病弱だったという奥様だろうか。

「いまは、随してもらうしか、しようがないな」

「わたしも、そうしてあげたいけど。風のおとし子が、一生つきまとうわ」

諷うことに自信のないまゆみは、花冷えて風邪をこじらせ、男の意志に折れていた。

堤防で通りすがりに、まゆみは誰の葬式か訊いてみる。

「ご主人ですよ。交通事故です」

「いつだったのですか」

犬をつれた婦人は、まゆみを見詰めた。

「そう、黄砂が襲ってきた日だったから。それ以後、ずっと意識不明だったそうです」

あの黄砂にまみれたヴァイオリンの音は、熊内の悲鳴だったのか。

川の向うに焼場がある。その黒い煙突が後向きの熊内にみえる。墓地も花ざかりで、風に浮かぶ真綿が連なつたまま煙突にまつわりついている。美しい眺めじゃない。みどりのない花の輪を塗りつぶした不吉な絵だ。もう次の雨で、この風景は洗い落される。まゆみは煙突から噴出る煙を見たくなくなった。青いかげろうに踞っている間に、重油のシャワーを浴びた炎が、熊内を焼きつくすだろう。まゆみは、店への出勤が遅れても、いまはただ、若いかげろうに身を焦して、その煙が見たい気がする。

(完)

田麻 新



田麻さんの文学的出発は故椎名麟三氏との邂逅による。目下、椎名麟三の文学碑を同氏の故郷、姫路市に建てたため東奔西走の毎日である。一方、文学活動も活発で「十八丁は山の上」(九十五枚)と戯曲「女ふたり」(五十枚)を同人誌「十日」(十月号)に発表している。「十八……」は椎名氏の「母の像」を下敷きにした作品で、他方「女ふたり」は阿部定とサロメがからむ田麻さん独自の世界を展開している。大版読売広告社のアドマンとして活躍する傍ら、過去二回、インドを訪れ、その成果を単行本「シルプラウソンの神々」(宝塚出版刊)に結集している。昭和五十二年、第一回神戸文学賞受賞。尼崎市在住。